

大学における安全・安心な学習・研究環境について想うこと

教育地域科学部 芸術・保健体育教育講座 水沢 利栄

「スポーツリスクマネジメント」という授業を担当している関係から、授業に関係して事故が発生した場合の対応については、常日頃より考える機会が多い一人であろう。これまで私が担当した体育の授業においては、捻挫や骨折をはじめ、プールでの溺水、スキーでの脳震盪等の事故に遭遇し、直接対応してきた。これまでの授業中の事故では保健管理センターにお世話をいただき、救急車の手配をしていただいたこともあったが、お陰様にて、幸いすべての事故が大事に至

らずに済んできた。

学生が怪我や事故を起こした場合には、教務課あるいは学生課に連絡することになっていることを最近になって再確認する機会があったが、学内での再発防止の検討にも欠かしてはならない必須の手順であろう。また、学生に加入を勧めている「学生教育研究災害保険等」の受給手続きにも必要であり、これまで傷害保険の受給手続きを学生任せにしてきたことや、大学の指針によらずに学科内での事故報告に留めてい

たこともあったことを大いに反省している。

授業以外でも、キャンパス内は学生がお金を奪し取られたり、講義室に置いたカバンから財布を抜き取られるなど、必ずしも安全・安心であるとは言い難い状況である。

大学としては、このような事件が起こるたびに、掲示によって学生・教職員に通知して注意を喚起するとともに、警備会社に依頼して学内のパトロールを行なうことで対応し、さらに外灯の増設、深夜は通用門の施錠や建物の出入り口を身分証明書で開錠できる方式によって安全強化が図られてきたことはご承知のとおりである。

大学全体の緊急時の対応については昨2005年秋11月に「福井大学安全衛生マニュアル」が新たに発行され、事故等の内容に応じて消防署、人事労務課、保健管理センター、守衛所に連絡をすることが示されている。そこには福井市内の救急指定病院等の名前と電話番号が明示されている。これら情報の一覧表は各研究室・実験室等には掲示しておくことになっているのだが、私の研究室には未だ掲示していないことに気づき、この機会に慌ててコピーしたという始末である。当然、体育の授業を行う運動場や体育館などにも掲示しておかねばと思っている。さらにマニュアルの意図を理解した行動がとれるようなマニュアルの具体的な表現についても、今後考えてゆく必要があろう。

緊急時の備えの一つとして、昨年秋にAED（自動体外式除細動器）が文京キャンパス内に保健管理センター入口、守衛所、そして第1体育館ロビーの3ヶ所に配備された。ご承知の方も多いと思うが、突然死の死因のほとんどは心臓疾患で、その大部分が心室細動という病気である。心室細動になると心臓が痙攣し、ポンプとしての役割が果たせず、助かるチャンスは1分経過するごとに約10%ずつ失われると言われている。この心室細動に対して心臓へ電気ショックを与えることによって正常な状態に戻すのがAEDである。AEDは心臓の状態が電気ショックを必要としているかを器械が判断し、救命の手順を音声で指示してくれるので、手順どおりすれば救命行為が簡単に出来るようになっている。

教職員や学生を対象としたAEDの講習会は学内でも実施され、新入生には「大学教育入門セミナー」の授業の中でとり扱っているとのことである。このように学生および教職員の安全性の向上を図る動きが広がっていることは有り難いことではあるが、さらにAEDに関する記述を安全衛生マニュアルにも追加することや、学生や教職員をはじめ、学外から協力いただいている非常勤講師や業者の方々の安全にも寄与できることが必要であろう。

大学における危機管理は、「事故防止対策」、「救急対策」、「補償対策」の3つの対策が基本となると考えられる。さらにリスクマネジメントの考え方も取り入れて対策を進めていくことが重要と考える。つまり、事故や事件のリスクを減らし、もしも事件が発生したとしてもできるだけ早期にかつ経済的に解決することを目指す。たとえ裁判で訴えられたとしても、大学の真摯な対策姿勢が学外者からも理解されるような方策を日頃から実践しておくことが重要である。

この夏、カナダのトロント大学の危機管理について尋ねる機会があった。福井大学と比較すると非常に大きい規模の大学だが、ユニバーシティポリスというガードマンの組織と救急に対応できる保健管理センターのような組織の存在が事故発生時に大きな役割を果たしている。授業中に学生が怪我をするような事態が発生した場合には、救急に対応する部署（保健管理センター）に連絡を入れることにより迅速に救急の対処がなされる。また関係機関への情報伝達と報告書等の必要な手続きが示される。化学の実験等における事故においては、ケミカル・エクスプロージョンと呼ばれる任務を与えられた職員が救急処置に関する研修と教育を受けている。通常は廃棄物処理を担当している職員が兼務することが多いという。また、授業で学生が負傷して入院等のために授業に出席できなくなった場合、単位認定についてはその学生のために特別の試験やレポートを課して、学生の単位修得に関してチャンスを保証している。体育の授業等では、怪我に備えてすべての学生を対象に保険に加入し、学生には治療にかかる経費の負担を少なくするように配慮されている。それはまた大学側にとっては、事故の責任を求めて学生が損害賠償を求める訴訟を抑えることを意図しているものである。福井大学の学生教育研究災害保険は任意の加入だと思うが、教員の立場からすると、実習を伴う充実した授業を行うには学生全員が保険に加入していることが望まれる。また、トロント大学では、心肺停止の事故に備えて各部署、各研究室の職員一人は心肺蘇生法（CPR）を実施できる資格をもち、毎年研修を受けての更新が義務付けられている。また各フロアにAED1台が配備され、責任者が決められている。警備・防犯面ではユニバーシティポリスのガードマンがパトロールカーで学内を巡回している。恐喝や暴行事件が夜間の駐車場で多く発生していることから、午後7時以降は要請すれば二人のガードマンが女子学生を駐車場までエスコートしてくれるとのことである。

福井大学においてもこれらの中から、取り入れられることから実現し、安心して学習・研究のできる環境を早急に整えたいものである。